

## 令和 7 年度 在外研究員 報告書

所 属	経済学部 産業社会 学科	職名・氏名	教授・杉本大三
調査研究題目	インド農村経済の研究		
研究先国	インド	研究機関	農業研究財団
研究期間	令和 7 年 6 月 2 日 ~ 令和 8 年 3 月 31 日		
<p>2025 年 6 月から 2026 年 3 月までの 10 カ月間、インド・バンガロール市において在外研究に従事した。具体的な研究課題は南インドのコーベリ川流域における農村経済の研究である。河川水を利用した灌漑農業経営の多様性や、農業所得の地域格差について調査と研究を行った。このテーマについて数年前から共同研究を行っている「農業研究財団 (Foundation for Agrarian Studies、以下 FAS)」が受け入れ研究機関となってくれた。</p> <p>研究対象地域であるコーベリ川流域はインド半島の南端に位置し、ケーララ州、カルナータカ州、タミルナードゥ州などにまたがる。コーベリ川の源流はアラビア海に近い西ガーツ山脈にあり、そこから東流してベンガル湾にそそぐ。つまりこの川はインド半島の先端部分を概ね横断する。全長は 800 km、木曾川 (全長 229km) の 3.5 倍である。</p> <p>この川は、水利をめぐる上流域と下流域の対立が激しいことで知られる。その歴史的原因は、下流域での灌漑開発がかなりの程度完成した後上流域での開発がスタートしたことにある。このことによって上流域の開発が制約されると同時に、下流域の既得権益が侵害された。河川水の配分をめぐる上流域 (カルナータカ州とケーララ州) と下流域 (タミルナードゥ州など) の交渉は 40 年以上続き、2018 年の最高裁判決によってようやく決着した。このこともあって近年は、暴動が発生するほどの対立は見られない。しかし、水不足時における配分ルールが定められていないという点で最高裁判決は弥縫的であり、問題が根本的に解決しているわけではない。基本的には、上流域に位置するカルナータカ州の方が、河川水利用において恵まれており、下流域のタミルナードゥ州は不満をかかえつつその現実を受け入れているといえる。</p> <p>我々の共同研究では、上流域と下流域における小規模な農家調査と、政府機関等での聴き取り調査を行っている。2024 年度に調査した下流域 (タミルナードゥ州) の村ではコーベリ川の河川水を利用して稲作が行われている。農業用水の利用可能時期や水量が、南西モンスーンの到達時期や降雨量によって変化するため、2 期作が可能なる年もあれば、1 期作のみとなる年もあり、農業所得は極めて不安定である。この村の農業の詳細は『名城論叢』第 26 巻第 4 号に研究ノートとしてまとめたので、もし (万が一) 興味のある方は手に取ってほしい。</p> <p>在外研究期間中の 2025 年度には上流のカルナータカ州の村で調査を行った。この村では概ね年間を通じて河川水を潤沢に利用できるうえに、地下水灌漑が普及している。豊かな農業用水を利用して、コメ、シコクビエ、サトウキビ、ココナッツなどが 1 年を通じて栽培されているほか、家畜飼養や養蚕も盛んである。特にサトウキビの収益性は高い。調査結果はまだ分析中であるが、農家の家構えを見れば、下流域の調査村よりも生活が豊かであることは明らかであった。</p> <p>この研究の主眼は、コーベリ川の上流域と下流域における農業経営の実像を描き出してインド農業の多様性を明らかにすることと、村落レベルの多様な農業発展とインドの経済成長との関係を分析することにある。力不足を露呈するようだが、利害が錯綜するコーベリ川の水利紛争について河川水の配分等に関する政策を提起することは、私のような外国人研究者には正直荷が重い。それは基本的にはインド人研究者の仕事と考える。私には上流域と下流域のそれぞれにおける対照的な農業の姿をありのままに提示することしかできない。しかし水利をめぐる深刻な対立が長期間続いたためか、コーベリ川流域全体を見渡した農業研究はあまり見当たらない。よそ者の冷めた研究が、やや希薄に映る上流域と下流域のコミュニケーションを多少なりとも改善することに貢献できればと思う。</p> <p>10 カ月間滞在したバンガロールは、IT 産業を中心とした経済発展の真ただ中にある。人口は 1300 万人を超え、今やインド第 3 位の巨大都市である。拡大する地下鉄網や、絶え間ない建築工事の槌音、深夜になっても人であふれかえるレストランなど、吹き出すような街のエネルギーに日々圧倒される思いだった。南インドの食事には多少苦勞したが、マンゴー、カスタード・アップル、ジャックフルーツ、パイナップル、ドラゴンフルーツ、スイカ等々、バリエーション豊かな季節の果物は素晴らしくおいしかった。</p> <p>自由な研究の時間と得難い暮らしの経験を与えてくれた、多くの方々の支えに感謝申し上げます。</p>			



Mettur ダム



サトウキビ運搬